

ひたちなか 埋文だより 45



上の内貝塚の鹿角製垂飾 市内の上の内貝塚うえのうちから出土した垂飾は、縄文時代中期のものと推定されます。耳飾りの可能性もありますが、ここでは頸飾りとして復元してみました。長さ20mm、幅18mm、厚さ3mm、重さ1.2gで、上部には紐を通すために3つの孔うがが穿たれています。下部が鉤状かぎに曲がり勾玉まがたまのようにも見えますが、これは、サメの歯の垂飾を模倣したもので、メジロザメ科に特徴的な歯の形が表現されています。ギザギサした歯の鋸歯縁については省略されたようです。

(2016.8.26 撮影 博物館実習「女子大生と装身具」第7弾)

CONTENTS

東日本最大級の横穴墓群 すごいぞ！十五郎穴横穴墓群

「出会い、別れ、そして夢考古学の旅路」 第17回 水戸市の遺跡の調査あれこれ (川崎純徳)

企画展解説補遺 ヘソのある大型石棒 / 並べて埋められた大型石棒 (鈴木素行)

横穴墓を歩く⑩ 吉見百穴 (弓 明義) 1ケース・ミュージアム 40 市内遺跡調査 2015

1ケース・ミュージアム 39 いただきもの。3 アカニシの化石 (矢野徳也)

遺跡めぐり 常陸国分寺とその瓦窯を歩く ひたちなか市の古墳⑧ 老ノ塚・ニツ森・孫目古墳群

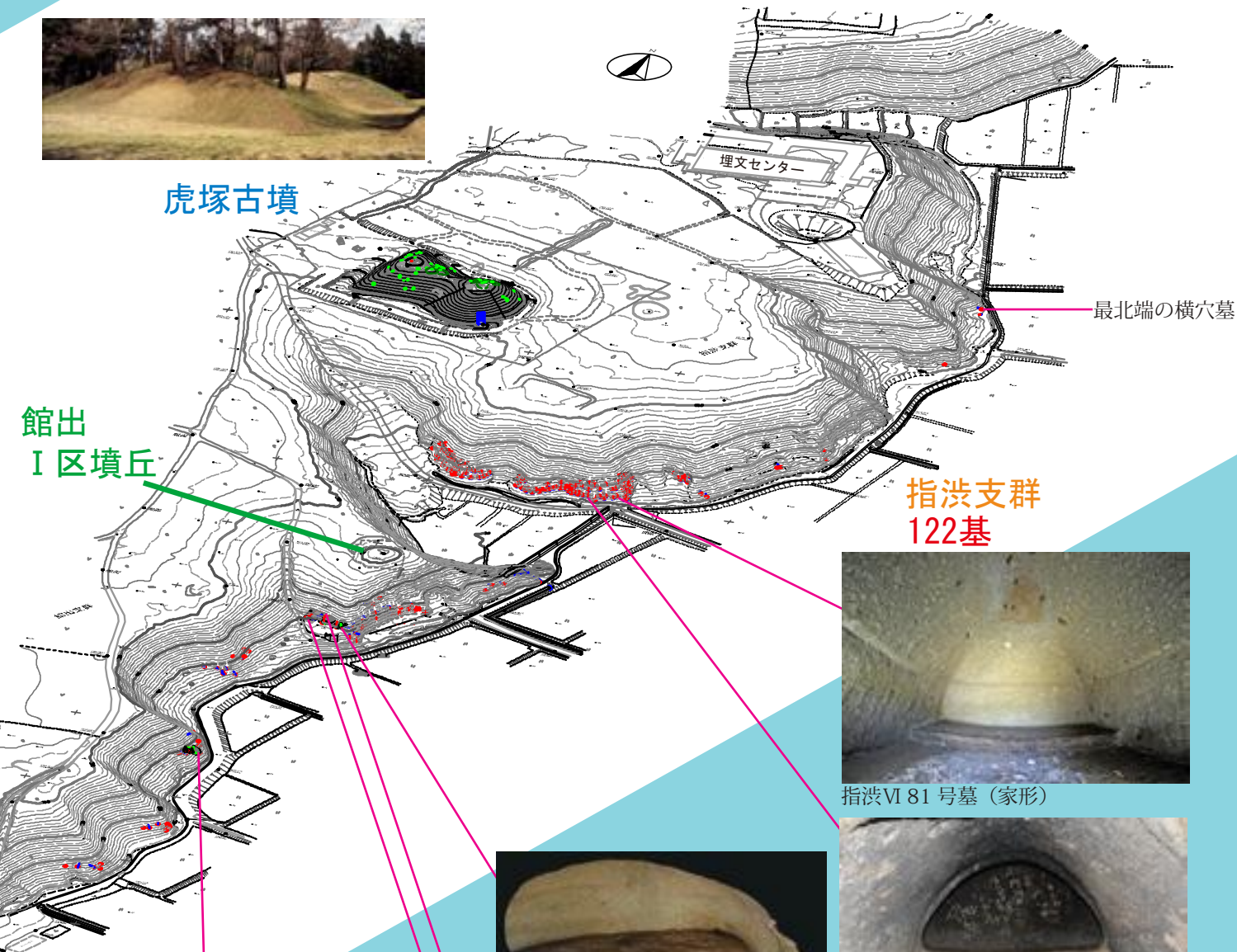
歴史の小窓⑰ 土器で米を蒸す 虎塚古墳花便り⑰ ヒトリシズカ ほか

東日本最大級の横穴墓群

すごいぞ！ 十五郎穴横穴墓群



虎塚古墳



最北端の横穴墓

館出
I 区墳丘

指浜支群
122基

館出支群
97基



指浜VI 81号墓 (家形)



指浜VI 76号墓 (高い屍床)



館出 I 32号墓 (アーチ形天井)



館出 I 33号墓 (家形)



館出III 5号墓 (アーチ形天井・礫敷)



館出 I 35号墓 (ドーム形天井・コの字形屍床)

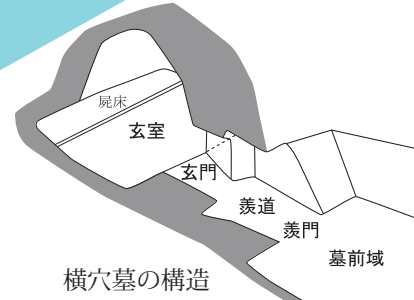
じゅうごろうあなよこあなぼく

十五郎穴横穴墓群は、古墳時代終末から平安時代にかけて丘陵の斜面に横穴を掘り、そこに亡くなった人を埋葬したお墓です。ひたちなか市教育委員会では、十五郎穴横穴墓群の範囲や基数を確認するため、2007年度から2014年度まで確認調査を実施しました。その結果、横穴墓が約1kmの範囲に分布していることが判りました。遺跡は、深い谷を境として、北から指洪支群、館出支群、笠谷支群の3つの支群で構成されており、確認できた横穴墓の基数は274基（図の赤丸）です。確認できた横穴墓以外にも多数の横穴墓が埋没しており、その数は500基以上と算出できました。この数は東日本最大級です。

調査では、遺体を埋葬する玄室の構造が家形のものや天井が平らなもの、テントのような穹窿形のもの、床面にコの字状に屍床があるものなど、いろいろな形の構造を確認しました。これらの特徴的な玄室構造の横穴墓は、1つの支群ではなく、場所を違えて位置していることも判りました。玄室構造は、お墓を造った集団によって違いがあるとされていますので、十五郎穴横穴墓群では多数の集団の存在が指摘できるかもしれません。

ココがすごい！！

- * 横穴墓の数が推定で500基以上・・・東日本で最大級
- * いろいろな形の横穴墓があることが判明・・・多数の集団が存在か
- * 蕨手刀という大刀・・・茨城県内では2例目の出土
- * 金銅製の飾りの付いた刀子・・・正倉院宝物以外では全国で初の出土例
- * 横穴墓の中に唐櫃があった可能性・・・全国で初
- * 出土した人骨のDNA調査・・・茨城県内の横穴墓出土人骨では初めて



横穴墓の構造

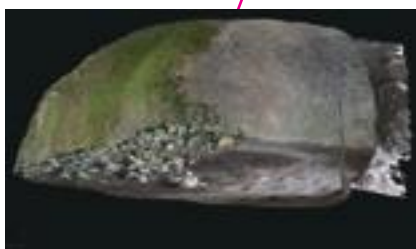
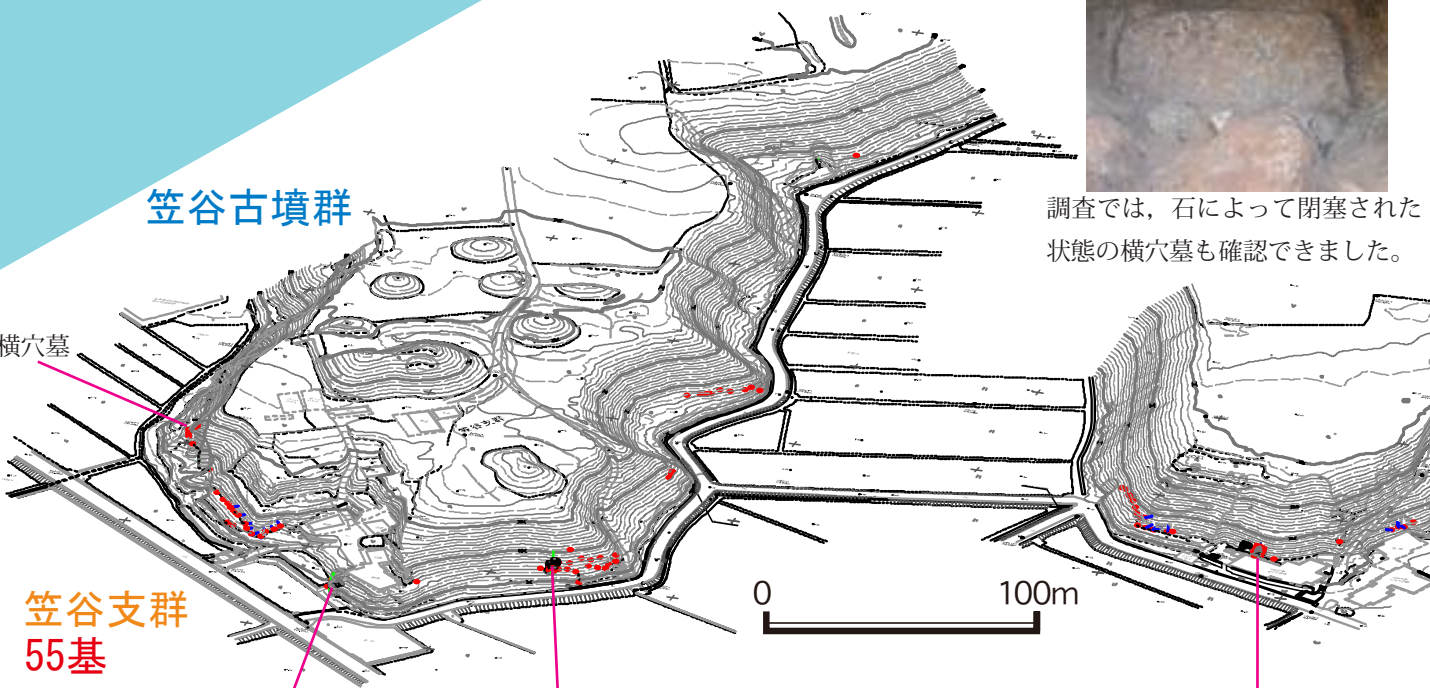


調査では、石によって閉塞された状態の横穴墓も確認できました。

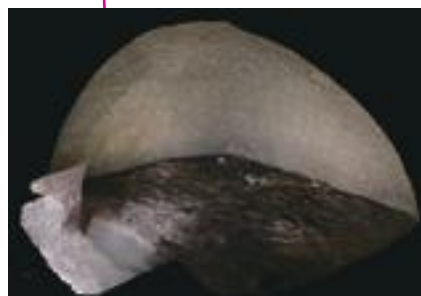
笠谷古墳群

最西端の横穴墓

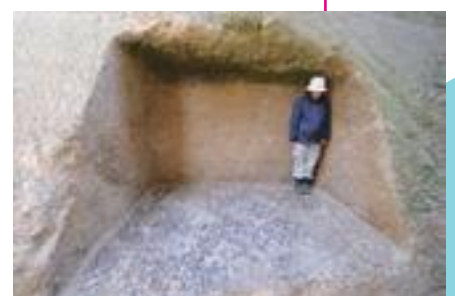
笠谷支群
55基



笠谷VI1号墓（家形）



笠谷V13号墓（穹窿形）



館出VII3号墓（大型・平天井）

館出支群 I 区第 35 号墓発掘調査の成果

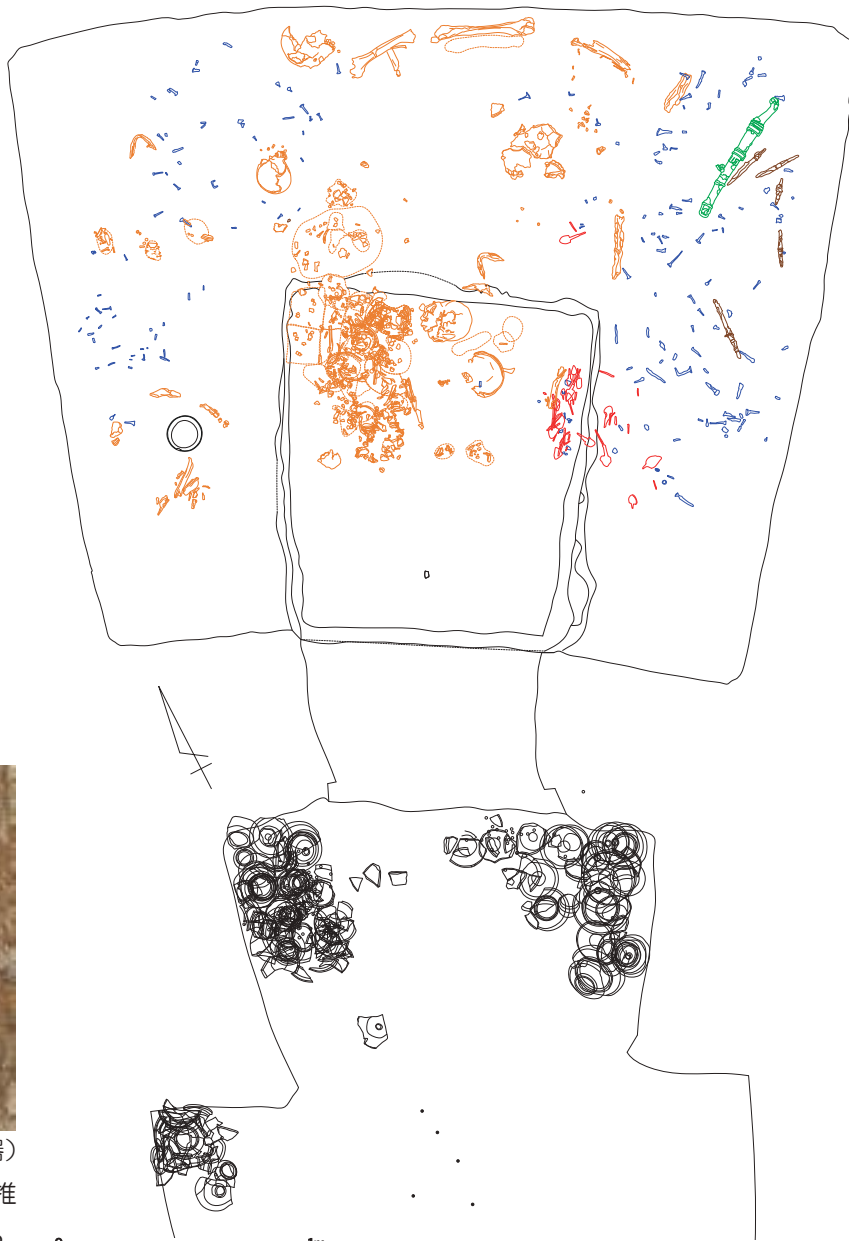
未開口の状態を確認した I 区第 35 号墓では、さまざまな調査や分析を実施しました。その結果、貴重な成果を得ることが出来ました。ここでは、その一部をご紹介します。



玄室からは、人骨とともに、土器 1 点、大刀 1 口、刀子 5 口、鉄鏃 19 点、鉄釘 181 片、炭化物、漆片と思われるものが出土しました。大刀は 8 世紀中葉で、土器は 9 世紀前半の時期と推定されます。



玄室の外の羨道部と墓前域からは、土器（須恵器）が 57 個体出土しました。時期は 8 世紀後葉と推定されます。これらの土器は、その接合関係から、どこか 1 箇所に集められた場所から、羨道部の両側と墓前域に置かれたものであることがわかりました。



■ 土器 ■ 大刀 ■ 刀子 ■ 鉄鏃 ■ 鉄釘・その他 ■ 人骨

館出 I 35 号墓平面図



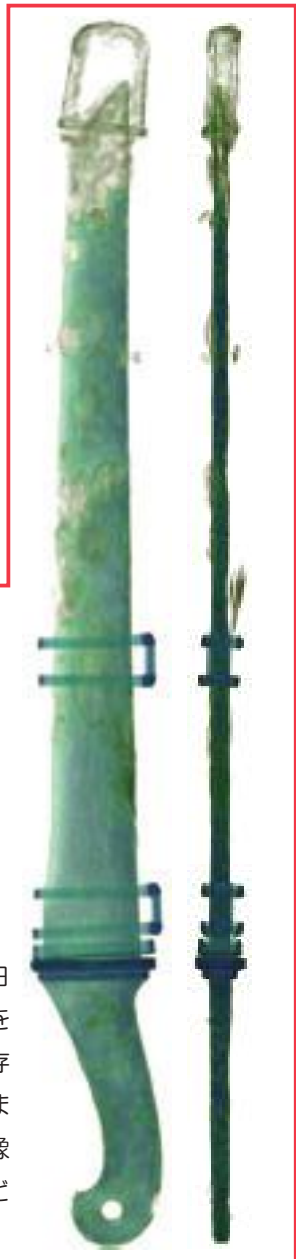
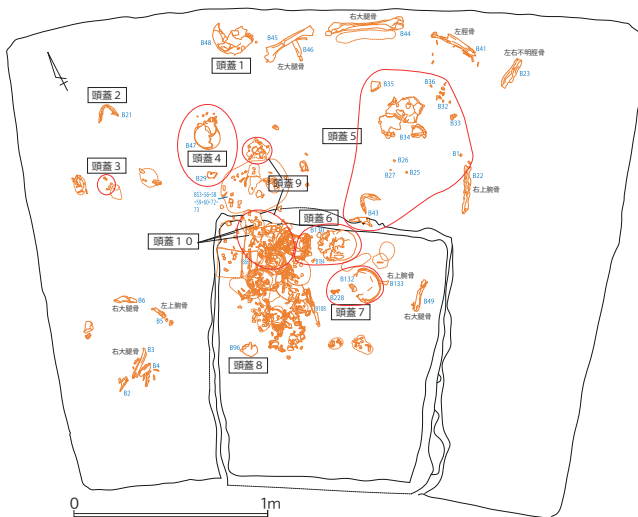
大刀は蕨手刀という刀で、県内では 2 例目の出土です。金銅製の拵えを伴う刀子は、全国で初めての出土です。



人骨の調査



人骨は、九州大学と北里大学に調査を依頼しました。その結果、10体分の人骨が埋葬されていることが判明しました。また、10体の内、3体は未成人であることや男性と女性がいることも判りました。DNAの調査では、3つの違う母系があることを確認しました。

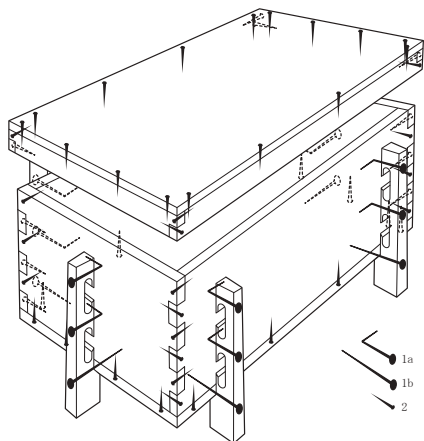


CT撮影調査



大刀と刀子は、国立奈良文化財研究所と日立製作所に協力いただき、CT撮影調査を行いました。この調査により、遺物の保存の状況や素材の種類を確認できました。また、画像は三次元データとなるため、映像資料として鑑賞したり、3Dプリンタなどでレプリカを制作する際にも役立ちます。

鉄釘の調査



181片出土した鉄釘を、奈良県立橿原考古学研究所の岡林孝作さんに調査していただきました。その結果、釘の形態や付着している木材から、図のような容器の存在が指摘されました。これは横穴墓では全国初の事例となります。



十五郎穴の昔話 番外編

十五郎穴横穴墓群では、一九二四（大正一三）年一月頃、現在の県指定となっている場所で石材採掘が行われ、遺跡が破壊の危機にさらされるという事態がございました。これに対して、当時湊商業学校長の職にあった大内義比氏ら那珂湊地区の人たちが、十五郎穴保存の声をあげました。この採掘反対の要望により、採掘は中止となりました。このような出来事を契機として、一九二五（大正一四）年八月に保旧会が組織され、のちに井上義氏を会長とした中根村史跡保存会が設けられ、一九四〇（昭和一五）年の県指定史跡へ至ることになります。

今回の十五郎穴の調査では、遺跡が非常に良い状態で保存されていることが明らかとなりました。これはひとえに地元の方のご協力があつてこそのおかげだと思いが、遺跡保存の前史に那珂湊地区の有志の活躍があつたことも重要なことだと思います。今後は、調査成果を踏まえて、先人に習って後世に十五郎穴を保存活用しなければならぬと感じています。

（稲田健一）

参考文献・佐藤次男二〇〇四『那珂湊市史 近代・現代』
ひたちなか市史編さん委員会



展示のようす

ひたちなか市には三二六の遺跡があります。そうした遺跡に住宅やアパートなどが建築される際に、事前の試掘調査を実施してきました。調査は市教育委員会からの委託を受けて、公益財団法人ひたちなか市生活・文化・スポーツ公社が実施しています。

試掘調査によって古代の住居跡などが確認された場合には、その保存について話し合いが行われます。その結果、保存することが難しい場合は発掘調査が行われます。なお二〇一五年は試掘調査のみであり、発掘調査はありませんでした。二〇一五年（平成二七年）に試掘調査は三〇件実施されています。今回のワンケース・ミュージアムでは、そうした試掘調査で出土した遺物の展示解説をおこないました。

たとえば、勝倉城跡では、市立勝倉小学校の運動場を一〇cm掘ったところ、幅六mほどの堀跡が見つかりました。地元の方によると、昭和二一年ごろに運動場が造成されて、そのときに土塁を削り堀跡を埋めたようです。堀の最上層からはインク壺が出土しましたが、これは戦前の勝倉小学校で使われたものかと思われます。

埋蔵文化財の調査は、遺跡の地権者の方々をはじめ、多くの方々のご協力とご理解によって、ようやく実施することができました。今回の小展示を開催するにあたり、調査に関係された皆様のご厚意に感謝申し上げます。ありがとうございます。

（佐々木義則）





ひたちなか市教育委員会へと寄贈いただき、埋蔵文化財調査センターに収蔵することになった資料をご紹介します企画の第三弾です。今回の展示では、『埋文だより』などに報告したことのある資料を紹介します。

「市毛遺跡の土製品」は42号、「那珂湊反射炉の窯資料」は44号の資料紹介コーナーで、それぞれ研究者が考察を報告しています。

「三反田蛭塚貝塚の土製腕輪」は、表紙を飾る遺物として43号に登場。これは、数連の貝輪を粘土で模したものと考えています。土製腕輪のモデルになったと考える貝輪の参考に、ボランティアスタッフが作成した現生ベンケイガイ製の貝輪を展示しました。紐で組み上げたのは栃木県埋蔵文化財センターの方です。土製腕輪を寄贈された臼井克夫氏は、ひたちなか市内外の多くの遺跡を訪れ遺物を採集しており、「十万原遺跡の押型文土器」もその一つです。これは

県内では六例目の報告という珍しいものです。「守谷市のアカニシ化石」は『埋文だより』30号で紹介した貝容器のよい参考資料となります。

「尼ヶ称の縄文土器」は『平成26年度市内遺跡発掘調査報告書』に掲載した資料の一つです。資料を採集したのは、寄贈された大和田氏の御尊父で、『埋文だより』40号の記事「小鍋沢の縄文土器」に出ている「伯父」さんこと高瀬氏です。寄贈資料からは那珂湊を中心にいろいろな遺跡で資料を採集されることがわかります。尼ヶ称遺跡は、南西に中丸川を望む台地の縁にあります。北には縄文・奈良・平安までの集落跡をもつ宮後遺跡が近接しています。市内遺跡の発掘調査では台地の縁に近いほうに土坑(縄文時代)しか検出されていませんが、宮後遺跡とのつながりと出土遺物からは、同じように集落跡があることが予想されます。寄贈資料からもこのことを追認することができました。

最後になりましたが、展示した資料、そしてご紹介しきれなかったさらに多くの貴重な資料を寄贈いただきましたこと、深く感謝申し上げます。(菊池順子)



アカニシの化石

矢野徳也

アクキガイ科の巻貝で、高さは一〇cmを超え、口は大きく開き、殻は厚い。巻いている部分(螺塔)は低く、堅牢な貝である。潮干狩りで獲れるような深さには少ないが、北海道以南の砂質の浅海に棲み、特に温かな内湾には多い。現在の東京湾にも生息する。

今から十三万年前の関東平野に海が広がっていた。古東京湾と呼ばれるこの海は、水戸付近から銚子、房総丘陵をつなぐ砂州で東側が閉ざされた内湾となり、湾に注ぐ河川の堆積物が次第に埋めてゆき、五万年前には消滅してしまう。この海に堆積した地層が台地を構成する成田層で、茨城県中部では見和層と呼ばれている地層に相当する。成田層には海生貝類の化石が密集している部分があり、特に内湾化した時代の地層、木下部層には暖水性の貝類化石が見られる。これに相当する化石は千葉県北部から茨城県南部、神奈川県東部まで分布する。木下部層ではバカガイ、ハマグリ、タマキガイ、イタヤガイ、イタボガキ、マガキ、

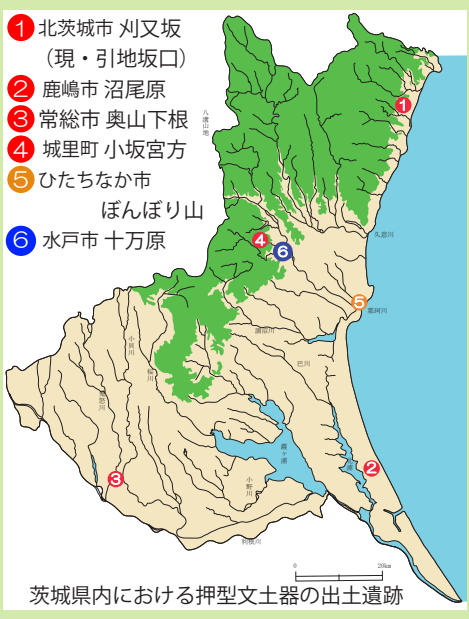
(アカニシ化石写真縮尺約1/2)

*寄贈者の皆様：臼井 克夫氏・大和田 恵子氏・川口 武彦氏・斉藤 新氏・杉岡 真人氏 (50音順)

ミルクイ、ウチムラサキ、サルボウ、ハイガイなどが見られ、アカニシ、ヤツシロガイといった大きめの巻貝化石も産する。特にアカニシは高さ一五cmを超える大型のものも珍しくない。

十萬原遺跡の押型文土器

押型文土器とは、小枝のような棒状のものに格子・山形・楕円などの模様を刻み、これを土器表面に回転しながら押し当てて文様を施した土器群の名称です。分布は、中部・近畿を中心に、関東・東北・九州・四国・北海道と、ほぼ全国にわたります。時期は、縄文時代早期前半から前期にかけてです。中部・近畿が先行し、北海道では遅れて、前期に入ってから現れます。



るのは、中部では立野・樋沢・沢・細久保式、近畿では大鼻・大川・神宮寺・高山寺・徳谷式、東北では日計式などがあります。尖底深鉢形の土器であるこれらの型式が編年上のどの位置にあるか、まだ明確ではありません。関東地方では、早期の撚糸文系土器から沈線文系土器と共伴すると考えられています。茨城県域では、五遺跡(刈又坂・沼尾原・奥山下根・小坂宮方・ぼんぼり山)から中部系の押型文土器の報告がありました。これらの遺跡では、沈線文系土器の「三戸式」または「田戸下層式」が出土しています。

六遺跡目となったのが、市内臼井克夫氏寄贈の水戸市北端、那珂川の右岸にある台地上に位置する十萬原遺跡ガランドウ地区の土器片です。楕円文が横位に施文された胴部破片で焼成良好。断面は黒褐色です。胎土には、石英粒が多く見られます。ここに市内ぼんぼり山遺跡の土器片と共に紹介します。ぼんぼり山ものは山形文が横位に施文された胴部片です。いずれも在地の土器ではなく、「三戸式」もしくは「田戸下層式」に伴うと考えられます。(菊池順子)



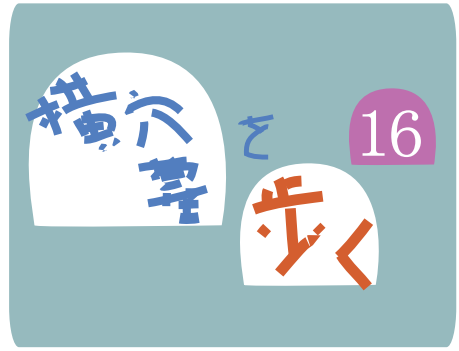
楕円形押型文の施文具と回転圧痕

0 5cm



階段注意

* 「十萬原遺跡の押型文土器」参考文献：江坂 輝弥 1955 「茨城県多賀郡刈又坂遺跡」『日本考古学年報』3, 原川 虎夫・原川 雄二 1974 「東北地方押型文土器の諸問題」『遮光器』8号



埼玉県比企郡吉見町
よしみひやくあな
吉見百穴

弓 明義

(吉見町教育委員会)

国史跡・吉見百穴は東武東上線東松山駅の東方約2kmの吉見町大字北吉見字六耕地・八耕地地内に所在し、吉見町と東松山市の境界を流れる市野川左岸に面する標高約五四mの凝灰質砂岩からなる丘陵斜面に造られている。

吉見百穴の発掘調査は明治二〇年に東京帝国大学(現東京大学)の坪井正五郎(つばいしょうごろう)が当時二四歳に行われた。調査の結果、平均約四五度の急勾配な斜面から二三七基の横穴が確認されて、その性格を「コロボツクル人の住居説」として唱えたことで、「墓穴説」を唱える研究者と、当時の学会を二分する大論争となるが、その後の調査・研究によって横穴が古代の埋葬施設(墓)であることがわかり、大正十二年には国の史跡として指定されている。戦時中には同じ場所に地下軍需工場が造られ、いくつかの横穴墓が壊され、現在の横穴墓の数は二一九基となっている。



吉見百穴横穴墓群分布図

横穴墓は、斜面全体に対して斜行する平行線上に配置され、その内部構造は遺体を埋葬する玄室(げんしつ)・玄室の入口にあたる玄門(げんもん)・進入路となる羨門・羨道(せんもん・せんどう)・前庭部からなる。玄室内部には遺体を安置するために一段高くベッド状にした有縁棺座(かんざ)をもつ横穴墓が一二四基確認されており、吉見百穴の特徴の一つとなっている。また、棺座の縁や玄室から羨道にかけての床面に排水溝が設けられ



吉見百穴



横穴墓(玄室内部: 2棺座)

ているものもみられる。

玄室の平面形は、ほぼ正方形に近い形態を基本として長方形・台形・楕円形など八形式が認められる。また、玄室の立面形は、いわゆるドーム状を呈するものが多数を占め、他にもアーチ状や平らな天井を持つものもあり、六形式が認められる。出土遺物には吉見百穴から出土したと伝えられる須恵器の高坏(たがづき)・短頸甕(たんけいゑ)・フラスコ形長頸瓶(ひらめ)・提瓶(ていびん)・直刀(ちよくとう)や刀装具(とうそうぐ)・鉄鏃(てつぞく)・耳環(みみかみ)・金環(きんわん)・銀環(ぎんわん)・勾玉(まがたま)・管玉(くだたま)・閉塞石(へいそくいし)などがある。

横穴墓の造営年代は出土遺物などから六世紀末から造られ始め、七世紀後半までの時期が想定されている。

吉見百穴の北東約3kmには、ほぼ同時期の造営年代と考えられる黒岩横穴墓群があり、日本考古学史上重要な位置を占める両横穴墓群となっている。



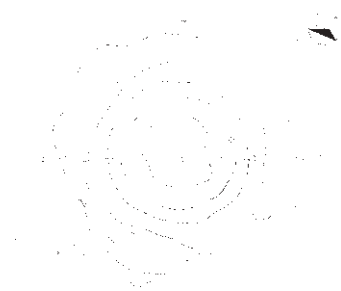
孫目古墳群・二ツ森古墳群・老ノ塚古墳群の位置



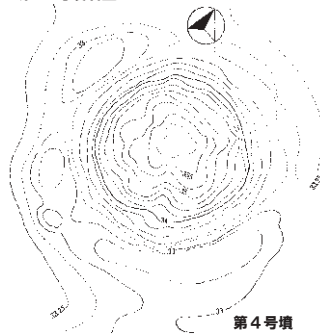
第4号墳



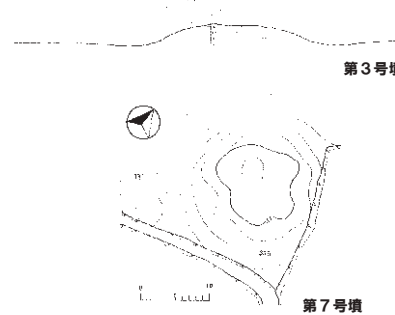
第10号墳石室



第3号墳



第4号墳



第7号墳

老ノ塚古墳群規模一覧

番号	墳形	規模	
1	円墳	直径約25m	高さ約2.6m
2	円墳	直径約20m	高さ約1.2m
3	円墳	直径約30m	高さ約3.0m
4	円墳	直径約28m	高さ約2.8m
5	円墳	直径約23m	高さ約2.3m
6	円墳	全長約16m	高さ約1.0m
7	円墳	全長約22m	高さ約1.2m
8	円墳	?	?
9	円墳	?	?
10	円墳	直径約20m	高さ約2.0m
11	円墳	?	?
12	円墳	?	?

老ノ塚古墳群

見学ガイド

墳の墳丘の保存がよく残されて
集まっている様子を見学できる遺跡
東古墳群で同じような古墳の密

- * 老ノ塚古墳群は私有地内にあるため、道路から見学してください。
- * 二ツ森古墳群第2号墳は、自由に見学できます。
- * 孫目古墳群は、見学できません。

ひたちなか市の古墳

8 老ノ塚古墳群・ニツ森古墳群・孫目古墳群

老ノ塚古墳群は、ひたちなか市の北部、^{しんかわ}新川から樹枝状に延びた谷奥の台地上に位置しています。古墳群の東側には佐和高校、西側には佐野中学校、南側には佐野小学校があります。古墳は12基を確認していますが、現在残っているのは8基で、第10号墳以外は杉林の中に点在しています。古墳の規模は直径が16～30mの円墳です。発掘調査を実施していないため古墳の詳細は不明ですが、第10号墳では凝灰質泥岩製の横穴式石室の一部が露出しています。また、第6・7号墳では、戦後地元ぎょうかいしついでいがんの中学校の先生が墳丘の一部を発掘し、埴輪が出土したとも伝えられていますが、その埴輪は確認できず、古墳の表面でも埴輪を確認できません。よって、古墳が築造された時期は7世紀代と考えられます。

ニツ森古墳群は、老ノ塚古墳群からJR佐和駅方向に約700mの場所に位置しています。古墳は円墳2基が確認されていて、北側が第1号墳で、南側が第2号墳です。第1号墳は、直径約28m、高さ約3.2mを測り、墳頂部には小さな祠が祀られています。第2号墳は、直径約27m、高さ約3.0mで、墳頂部にはニツ森稻荷神社があります。2つの古墳とも発掘調査を実施していないので詳細は不明ですが、老ノ塚古墳群と近い場所にあることから、ほぼ同じ時期と推定されます。

孫目古墳群は、老ノ塚古墳群から北へ約1.2kmの場所に位置しています。古墳は円墳3基が確認されています。古墳の規模は、第1号墳が直径約20m、高さ約1.5m、第2号墳が直径約18m、高さ約1.0m、第3号墳が直径約20m、高さ約1.8mを測ります。その内の1基が、1998年度に茨城県教育財団によって発掘調査されました。墳丘は一部しか残っていませんでしたが、幅約3mの周溝が確認されたことにより、直径18mの規模だとわかりました。埋葬施設は壊されており残存状況はよくありませんが、凝灰質泥岩製の切石の横穴式石室を確認しました。古墳に伴う出土遺物もありませんでした。古墳の時期は、石室や埴輪が出土していないことなどから、7世紀前半頃の築造と考えられます。



孫目古墳群第1号墳（墳丘と石室）



老ノ塚



ミニ知識
老ノ塚古墳群は、各古墳の密集地帯から、古墳の密集地帯です。市内では、磯崎古墳集を見ることができます。

* 古墳の場所や市内の古墳の概要については、『埋文だより』第37号をご覧ください。

* 参考文献：大塚初重ほか1982『勝田市埋蔵文化財分布調査報告書 昭和56年度版』勝田市教育委員会

大塚雅昭1999『孫目A遺跡・孫目古墳』

* 航空写真は国土地理院ウェブサイトより転載し、古墳等を追加しました。

再び伊東重敏さんについて 水戸市はほとんどを伊東重敏さん、伊東さんが亡くなってからは井上義安さんが調査を継続されていた。伊東さんは水戸市教育委員会に勤務し文化財保護を担当していた。水戸市はこのころ文化財保護に熱心とは言えず、各所で遺跡の破壊がおこっていた。その一つに姫塚古墳があった。姫塚古墳は愛宕山古墳群を形成し、比較的古い前方後円墳と考えられていた。この一帯に宅地造成が計画され未調査のままに姫塚古墳が破壊されてしまったのである。

姫塚破壊の情報を持って伊東さんを市役所に訪れると、彼は休暇を取って石岡の国分尼寺の調査に出かけて不在であった。その後、水戸市の文化財保護をないがしろにして他の市町村の調査に出かけるとは何事かと伊東さんを非難した。このことがあって、伊東さんとは没交渉になった。

しばらくして伊東さんが市役所を退職して遺跡発掘に専念するとの情報を聞いた。その後、伊東さんから連絡があった。法政大学の通信教育を受けており、頼みがあると言っているので会う事になった。「水戸市近辺の通信教育学生と定期的に勉強会を開いている。そろそろ卒業論文を書くことになるので論文の纏め方を指導してほしい」というものであった。それが縁で伊東さんとは会う機会が多くなった。一〇人前後の学生がいた。水戸市石川町のプレハブの研究所にもお邪魔したことがある。

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第17回 水戸市の遺跡の調査あれこれ



吉田古墳の墳丘測量図と線刻壁画実測図（『日本装飾古墳の研究』より）



川崎 純徳

吉田古墳と斎藤忠博士 水戸市の調査の思い出は吉田古墳である。斎藤忠先生が講談社から『日本装飾古墳の研究』を出版することになり、川上博義氏を介して吉田古墳の測量を依頼された。二日で測量図、壁画実測図を作成すると言う事で会い、相田公平さん、諸星政得さんらと仕事をした。測量の結果、方墳説を提示した。方墳に疑問を投げかけたのは伊東さんであった。伊東さんは方墳説を覆すために発掘調査を行った。調査については知らされていないが、終了後に伊東さんから「方墳で間違いなし」の報告を受けた。

高校のクラブ活動支援 一九八〇年代は高等学校のクラブ活動も活発であった。主として文化祭などでの考古資料の展示が多かった。特に水戸二高、大成女子高、茨城高校、常北高校等で活発であった、要請があれば学校や現地に出かけた。この中で進藤敏一先生が顧問を務めておられた茨城高校史学部の要請を受けて水戸市塙東遺跡、馬場尻遺跡の調査に協力した。また植田泰史先生が顧問の常北高校では那珂町木の倉遺跡等の調査が行われ、筆者もお手伝いに参上したりした。水戸二高には史学部顧問に秋山高志先生がおられた。先生は近世史が専門であったが文化祭に考古資料展を開くと言うので展示について相談を受け指導に出かけた。塙東遺跡の調査、整理作業には茨高OBの金子進さんや宮内良隆さんらも参加していた。

常陸国分寺とその瓦窯を歩く

二〇一六年度のひたちなか市埋蔵文化財調査センターの遺跡めぐりは、五月一九日に行われました。遺跡めぐり当日はお天気に恵まれ、午前中は古代常陸国の中心地である石岡市の常陸国衙跡、常陸国分寺跡、常陸国分尼寺跡を訪れ、午後はそれらの瓦を生産していた国内最大級の瓦窯である石岡市瓦塚窯跡を訪ねました。

常陸国衙跡は、現在の石岡小学校になります。平成一三年から一九年に、石岡市教育委員会が実施した確認調査によって、八世紀から一〇世紀におよぶ国庁の姿が明らかとなっています。



上：常陸国衙跡 下：瓦塚瓦窯跡

遺跡めぐり一行は、いまでも運動場の下に残る当時の大建築を想像しながら、小学校脇の資料館の展示も見学しました。

常陸国分寺跡は、これまでの発掘調査によって、金堂・講堂・鐘楼（もしくは経蔵）・回廊などの位置がわかっていますが、国分寺の象徴であった七重塔の場所は確認されていません。ここでは金堂・講堂跡に残る礎石をながめながら当時の姿に思いをはせました。

常陸国分尼寺跡は、中門・金堂・講堂の基壇が礎石とともに残り、史跡公園として整備されています。整備された公園のなかを歩きながら、伽藍の規模を体感しました。一行の耳に尼僧の読経の声は届いたでしょうか。

瓦塚窯跡は、常陸国府から離れた旧八郷町域にあります。平成一九年から二五年の調査により、三四基の瓦窯が確認された日本最大級の瓦窯跡です。遺跡は雑木林となる山の斜面に広がっています。一行は細い道を踏みしめながら、その下に眠る古代の窯跡にロマンを感じていました。現地にはかつて調査した古代窯跡が残されており、そのなかを眺めたり写真を撮ったりと、楽しいひと時が過ぎていきました。（佐々木義則）

歴史の小窓 その二七

土器で米を蒸す



古代の人々は米を蒸して食べていました。「奈良朝食生活の研究」には、一般的には木製の甑（こしき）

が用いられていたとあります。でも木製甑はほとんど出土しないのでよくわかりません。集落遺跡を発掘すると、土師器や須恵器の甑が出土します。常陸国那賀郡では、木葉下窯で焼いた須恵器甑が、九世紀半ば頃に多く出土します。それはおそらく九世紀前半に焼かれたものと考えられます。なぜ、その時期に大量に焼かれたのでしょうか。九世紀に入ると須恵器生産は経済性を重視するようになりますから、須恵器甑の価格が下がり、比較的丈夫な須恵器甑が人々に好まれたのかもしれませんが、また、経済的に余裕のある家が増加したことも考えられます。ただし、須恵器生産は一〇世紀初めで終わるので、また木製甑が主流となっていくのでしょうか。（佐々木義則）

参考文献 関根真隆一九六九『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館



110 坂戸遺跡 111 孫田遺跡
112 西畑遺跡 113 山之上貝塚
114 山之上A貝塚 115 山之上
B貝塚
『茨城県遺跡地図』2001
に加筆)



図1 山之上遺跡群の位置



ヘソのある大型石棒

(茨城県鹿嶋市山之上遺跡群出土 個人蔵)

鈴木 素行

1 山之上遺跡群

山之上遺跡群とは、茨城県鹿嶋市山之上にある坂戸、孫田、西畑の三遺跡と、山之上、山之上A、山之上Bの三貝塚の総称であり、縄文時代中・後期の貝塚を伴う集落跡が推定される範囲である(図一)。この遺跡群は、太平洋と北浦に挟まれた鹿島台地にあり、北浦に向って解析された半島状の部分に位置する。三つの貝塚はいずれも台地の斜面に形成されていた。採集された土器には、中期後葉から後期前葉の時期の破片が多い。

遺跡群の中に建立された氏神社に大型石棒が祀られていることは、一九七二年の『鹿島町史』第一巻が記載している(海老原ほか一九七二)。一九九九年に現地を訪れた際にも、ともに五〇cmを超える二つの破片が、社の両側に分けて置かれていた。社内ではなく傍らにむき出しの状態であったことから、保全のため、広く公表することは躊躇われていたが、二〇一六年に開催した企画展「日立変成岩の石剣」への借用と、これを機に引き続き鹿嶋市教育委員会が展示と保管にあたるという段取りが整えられた。本稿では、その所在とともに大型石棒の観察所見について報告しておきたい。なお、氏神社は坂戸遺跡として区分された範囲内に位置するが、発見からの経緯を明らかにし得ないので、山之上遺跡群という括りで記載している。

2 山之上遺跡群の大型石棒

山之上遺跡群の大型石棒は、二つの大破片が



A面の凹穴 B面の凹穴

図2 表裏面の凹穴

接合する。一方の端部は欠損しており、単頭形であるのか両頭形になるのかは確定できない。この破断面に調整されたよ

うな痕跡は認められない。接合した現状での長さは一六〇cm、幅一八cm、厚さ一六cmを測る(図三)。重さは七七・七kgであった。石材は、「緑泥片岩」と呼び慣わされている三波川変成帯の緑色片岩。図示した裏面には、分割部分の特に頭部方向に、片理に沿う胴部の剥落が見られる。剥離・敲打・研磨などの製作痕跡はほとんど残されておらず、風化によるのか、表面の細かな凹凸は「梨肌」という印象である。

大型石棒の胴部には、表裏面に凹穴が形成されている(図二)。頭部の先端からは、A面(表面)が九〇cm余の位置、B面(裏面)が一二〇cmの位置にあり、表裏で対称的に配置されたものではない。A面の二つは幅中央にある凹穴の方が深く、B面の一つとともに、断面は楕円状を呈する。

接合する二つの破片は分割部を境にして色調が明瞭に異なる。頭部の破片に比べて、胴部のみ破片は全体的に黒ずんでいる(「ひたちなか埋文だより」第四四号に掲載した石棒全体のカラー写真

を参照されたい)。この胴部の黒ずみは、破片が接合した破断面にも及んでいる。また、胴部の表裏に形成された凹穴の内部にも認められた。

3 大型石棒の凹穴と変色

山之上遺跡群の大型石棒に指摘した凹穴と変色については、発掘調査で出土した他遺跡の大型石棒にも観察されている。

松風台遺跡 遺跡は神奈川県横浜市に所在する。後期初頭「称名寺式」の柄鏡形敷石住居跡JT・3から出土した大型石棒の一つ(図四の

1)に凹穴が形成されていた。この大型石棒は単頭形であり、長さ六四cm、重さ一一・三kg、石材が「結晶片岩」と記載されている(渡辺一九九〇)。凹穴は長軸中央やや上寄りに位置し、穴の断面は楕圓形を呈する。裏面は剥落している、凹穴の形成が片面とは確定できない。剥落は火撥ねによるもので、住居跡に残された火事の痕跡に伴うものと考えられる。裏面には色調の明瞭に異なる破片が接合している。

南三島遺跡 遺跡は茨城県龍ヶ崎市に所在す

る。後期初頭「称名寺式」の第四七号住居跡から出土した大型石棒(図四の2)に凹穴が形成されていた。この大型石棒は単頭形であり、長さ五九・八cm、重さ八・九三kg、石材が「角閃片岩」と記載されている(齊藤一九八七)。凹穴は一箇所のみで、長軸のほぼ中央に位置する。「頭部から体部上半にかけて黒色の変色部分」が観察されており、これは、住居跡に残された火事の痕跡に伴うものと考えられる。

中田新田遺跡 遺跡は茨城県古河市に所在す

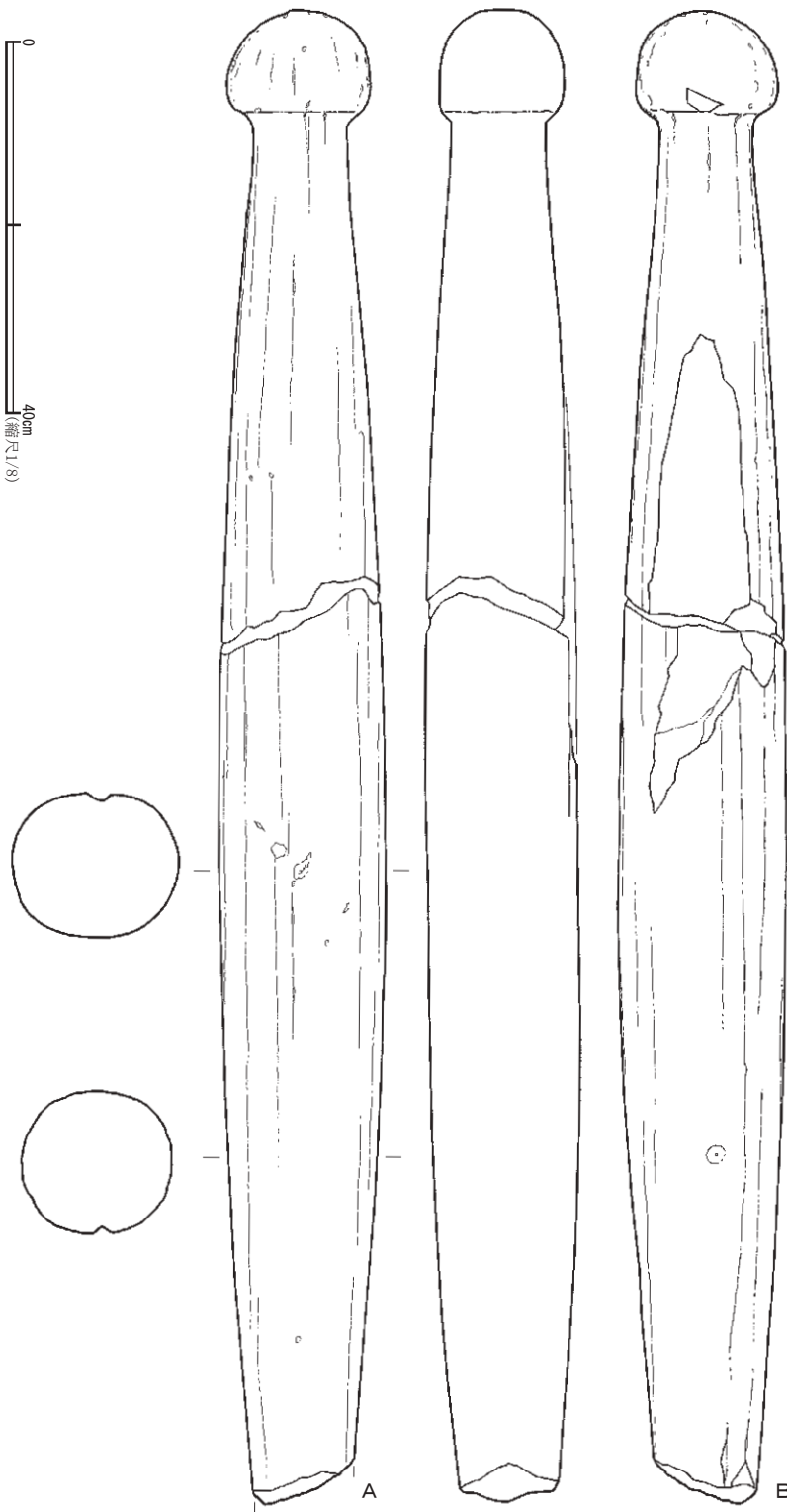


図3 山之上遺跡群の大型石棒

る。遺構外から出土した大型石棒(図四の3)に凹穴が形成されていた。遺跡には「後期の堀之内I期から晩期の安行III期まで」の遺物が出土している。この大型石棒は、長さ五一cmほどの単頭形であり、重さ四・九kg、石材が「緑晶片岩」と記載されている(鈴木ほか一九八六)。凹穴は一箇所のみで、長軸のほぼ中央に位置する。この面を中心に黒色の変色が観察され、それは凹穴の内部にも及ぶ。他にも、胴部中央に凹穴が位置するように見え

図4に掲載した大型石棒の報告書 齊藤弘道 1987『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書16 南三島遺跡3・4区』茨城県教育財団文化財調査報告第44集 財団法人茨城県教育財団、鈴木素行ほか 1986『古河市史 資料 原始・古代編』古河市、渡辺務 1990『横浜市緑区松風台遺跡』日本窯業史研究所報告第38冊 日本窯業史研究所

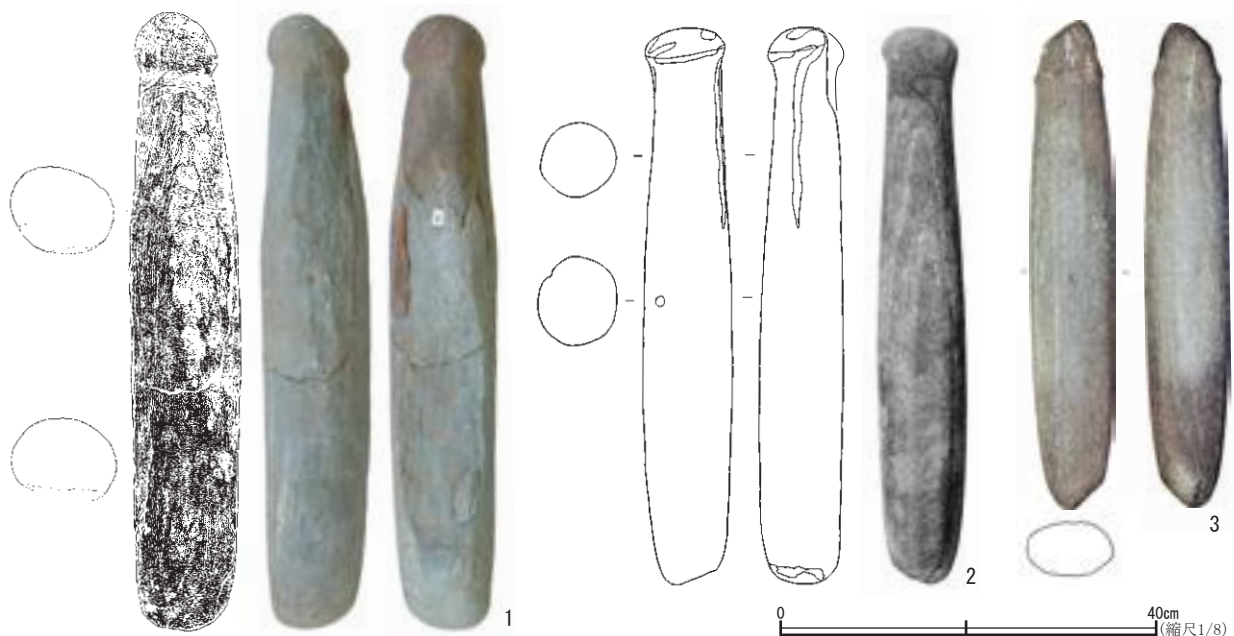


図4 胴部中央に凹穴のある大型石棒 (1. 松風台遺跡JT-3 2. 南三島遺跡3区47住 3. 中田新田遺跡)

る大型石棒はあるが、現在のところ、これら三点を確実な事例と捉えておきたい。

三つの事例に共通するのは、単頭形であり、凹穴が長軸のほぼ中央部に位置し、確実な二つの事例はそれが片面に限られること。中田新田遺跡の事例では、変色という焼痕との前後関係から、大型石棒の「燃焼」以前に凹穴が形成されていたことが明らかである。

4 山之上遺跡群の二つの凹穴と変色

山之上遺跡群の大型石棒には表裏の両面に凹穴が形成されていた。他の事例を基準にすると、次のような経過が想定されてくる。

山之上遺跡群の大型石棒は両頭形であり、その状態で長軸のほぼ中央にA面の凹穴が形成された。その後、二つの破片に割れたが、一〇〇cmを超える一方が単頭形の大型石棒として再利用された。この状態で長軸のほぼ中央にB面の凹穴が形成された。最終的な「燃焼」に伴い、再利用の大型石棒にのみ、破断面に及ぶ明瞭な変色が生じた。

山之上遺跡群の大型石棒を含め凹穴が形成された四つの事例は、全て三波川変成帯の石材で製作されたものであった。凹穴が製作地で彫刻された可能性は否定できないものの、山之上遺跡群の大型石棒への想定は、消費地において祭儀に伴い形成されたものではなかったかと考えさせる。その規則性や行為の前後関係を検討する事例の抽出のために、この凹穴を大型石棒の「ヘソ」と呼んで注意を喚起しておきたい。

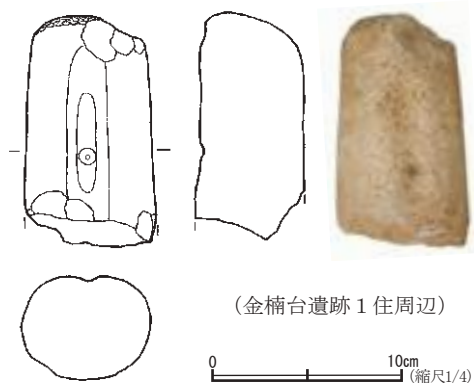


図5 凹穴のある大型石棒の破片

が形成されていた(図五)。石材は「大山石」。このような溝状の彫刻は、福島県川内村重石平遺跡(根本一九五七)の他、より北方面の東北地方に分布する。金桶台遺跡の事例からは、東北地方との脈絡、溝状から凹穴への変遷が推定され、象徴性の継承が窺えよう。その凹穴が象徴するものは、実際には「ヘソ」でなく、臍下の女性である。

千葉県松戸市金桶台遺跡の第一号住居址は後期初頭「称名寺式」で柄鏡形と推定される。この周辺から出土した大型石棒の破片には、長軸方向の溝中に凹穴

参考文献 海老原幸ほか一九七二『鹿島町史』第一巻／鈴木素行二〇〇七『石棒』『縄文時代の考古学』第一巻／鈴木素行二〇一二年『形石棒が埋まるまで―事例研究による「石棒」(鈴木二〇〇七)の改訂―』『縄文人の石神』／根本忠孝一九五七『重石平』縄文式遺跡と発見の石棒について『磐城考古』第六号

追記 國學院大學デジタルミュージアム「大場磐雄博士写真資料」に「昭和一八年 八月一三日」に撮影され「沼尾五作氏と石棒」というメモが残された山之上遺跡群の大型石棒の写真が公開されている。

* 「ヘソのある大型石棒」には、以下の個人及び機関にご協力をいただきました。飯島一生・糸川 崇・石橋美和子・折原 繁・立石尚之、鹿嶋市教育委員会・古河歴史博物館(中田新田遺跡石棒)・房総のむら(金桶台遺跡石棒)・横浜市ふるさと歴史財団(松風台遺跡石棒)(50音順・敬称略)

企画展解説補遺②



009 若森谷津遺跡 014 大曾根松原古墳群 301 若森南谷津遺跡 304 大曾根吾妻東遺跡 305 大曾根松原遺跡

図1 若森遺跡の位置

(『茨城県遺跡地図』2001に加筆)



並べて埋められた大型石棒

(茨城県つくば市若森遺跡出土 桜川市教育委員会所蔵)

鈴木 素行

1 若森遺跡
遺跡は、茨城県つくば市若森に所在するが、若森遺跡という名称の遺跡はない。大型石棒が掘り出された地点を現地で聞き取り調査してみると、遺跡の空白部に相当していた(図一)。離れた周辺部を遺跡が取り囲むのは、宅地が遺跡から除外されたことによると見られ、むしろ地形からは、縄文時代の遺跡が宅地の範囲を中心に形成されているのではないかと推定される。出土地を若森遺跡とした所以である。茨城県教育財団が調査した大曾根松原遺跡及び若森南谷津遺跡の範囲には、主に縄文時代中期後葉から後期前葉の土器の破片が報告されている(鈴木一九九〇)。大型石棒については、「昭和二十一年十一月縄文中期加曾利E式土器片と共に発見出土した完全形大石棒 南方に頭部を並べて二個が正しく併行して地下七十センチの処に埋没しておいた」(中村・藤田一九五三)と伝えられている。二点の大型石棒は、これらを掘り出した旧蔵者から中村盛吉が「一個一千元」で譲り受け、そのうち一点を藤田清に譲り二人で所蔵していたという(中村・藤田一九七二)。一九七九年の『茨城県史料』には、中村が所蔵する一点が実測図で掲載された。中村の死後は、藤田の私設資料館「汲古館」に二点とも保管されていたが、二〇一一年の東

日本大震災で同館が被災したこともあり、藤田の遺族から桜川市教育委員会へと寄贈されることになった。
2 若森遺跡の大型石棒
図二の1が中村盛吉の所蔵、2が藤田清の所蔵した大型石棒である。1は全くの無傷であるが、2は二つの破片が接合されている。原報告には、破片に分割されていたという記載はなく、破断面が新しいことから、後に生じた破損なのであろう。ともに単頭形であり、1は長さ

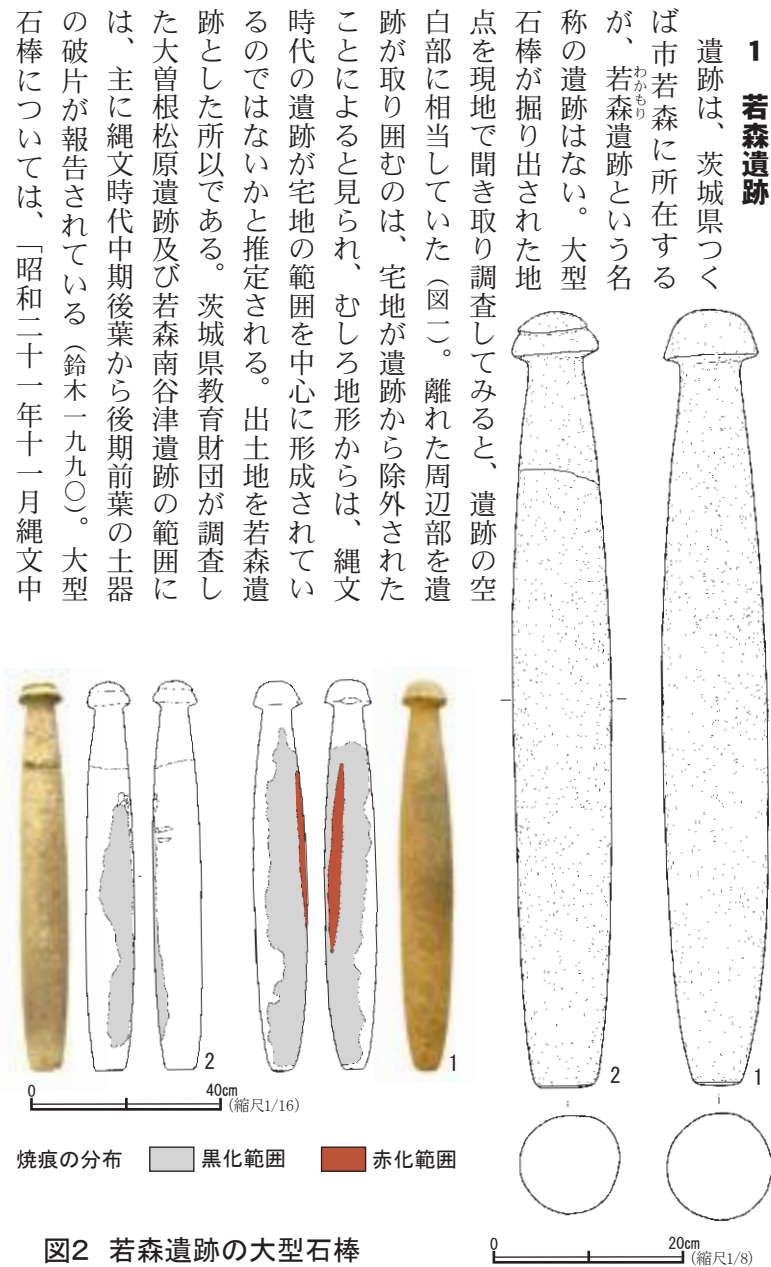


図2 若森遺跡の大型石棒

八二cm、胴部直径一一cm、重さ一四・七kg、2は長さ八二cm、胴部直径一〇cm、重さ一三・三kg。長さは同じでも、2の胴部がやや細く、その分軽量である。頭部の形状が、1は一段で半球状の笠形、2は二段の笠形で異なる。ともに全面が研磨されていて、研磨以前の製作痕跡はほとんど観察されない。1には赤化と黒化、2には黒化した面が形成されており、これらは被熱による変色と考えられる。石材は、一見「大石」に似るが、石英の斑晶を含まず、ともに凝灰岩である。

なお、「加曾利E式土器と共に」という土器は掲載されておらず、一九六〇年に「称名寺式」が設定される以前の報告であることから、記載の型式に相当する土器なのか確実ではない。

3 並んで出土した大型石棒の事例

複数の大型石棒が並んで出土した事例としては、現在の青梅市T・52遺跡に相当する「調布村千ヶ瀬」(松村一九一三)、八王子市北野遺跡(後藤一九四七)が古くから知られていて、ともに石棒の数は二点であった。若森遺跡も二点が並ぶ事例を追加したことになるが、これらはいずれも、出土状況が詳らかでない。

二〇一二年に国立市緑川東遺跡(そりかわひがし)で調査された敷石遺構SV1は、四点の大型石棒が並んで出土したことから注目された。二〇一四年には詳細な観察と分析が報告されている(和田ほか二〇一四)。この遺構は、敷石住居跡の一部であつ

たと推定され、遺構の廃絶後に、敷石の一部を抜去して浅く掘り込み、石棒を並置して埋め戻したことを考えてよさそうである。これは、「埋没」(鈴木二〇〇七)の事例に相当する。四点の石棒は、埋置された方向と距離から、二点ずつの二群に分けることができる。石棒1・2の西群と、石棒3・4の東群である。ここで、若森遺跡などに見られた二点を「埋没」の単位と仮定してみると、個体1とされた「中期末の様相をとどめる「北白川C式4段階」の土器片が東群の石棒4に被さるように出土し、個体3とされた「後期初頭「加曾利E V式」の土器片が西群の石棒2に被さるように出土している」とは、これを支持するのかもしれない。つまり、東群が旧く西群が新しい。同一遺構から新旧に



図3 緑川東遺跡敷石遺構SV1の大型石棒

よる複数の大型石棒が出土した事例には、神奈川県松風台遺跡JT・3がある。

東群は、頭部形状が一段笠形の石棒3と二段笠形の石棒4の組合せであり、若森遺跡に共通する。西群の石棒1・2はともに二段笠形の頭部形状をもち緑色を帯びた石材で製作されている。若森遺跡の二点の大型石棒には、部分的な変色から、横倒しの状態での「燃焼」(鈴木二〇〇七)が推定された。緑川東遺跡の四点については明瞭な変色を認め難いが、石棒3に観察された黒色の付着物と赤変については、「燃焼」によることを検討すべきと考ええる。また、この石棒3の石材については石英を含み「大石」(鈴木二〇〇七)ではないかと見ている。

四点の大型石棒が完形の状態のまま同一遺構内から出土することは稀有な事例であり、想像力を掻き立てる光景ではあるものの、その現象の解明は、事例ごとの観察と、事例どうしの比較から導かれるべきものであろう。

参考文献 後藤守一九四七『私たちの考古学 先史時代編』八重山書店
 / 鈴木美治一九九〇『主要地方道大穂千代田線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 松原古墳群・松原遺跡・南谷津遺跡』茨城県教育財団/西宮一男一九八九『原始古代』天徳町史 つくば市天徳地区教育事務所/藤田清中村盛吉一九五三『桜川文化3』藤田清中村盛吉一九七三『常総古文化研究』私家版 / 松村瞭一九二三『坪井先生最後の遺跡調査』『人類学雑誌』82 / 和田哲ほか二〇一四『緑川東遺跡 第二七地点』介護老人保健施設国立あおやき苑増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 国立あおやき会

*「並べて埋められた大型石棒」には、以下の個人及び機関にご協力をいただきました。飯島一生(こたろう)・河津美穂子・木下裕雄・越田真太郎・佐々木克典・真木優輔、青梅市郷土博物館・くにたち郷土文化館・桜川市教育委員会・八王子市郷土資料館 (50音順・敬称略)

文埋センターの日記 2016 前期

4月

1-3 虎塚古墳一般公開／7 明治大
学友の会見学／7-10 虎塚古墳一
般公開／8 川口武彦氏より資料寄
贈〔那珂湊反射炉耐火煉瓦ほか〕／12 水戸
市稲荷第一小学校へ資料貸出〔井上
資料縄文土器ほか〕／12 堀口遺跡本調
査開始／13-19 三反田新堀遺跡試
掘調査／19 水戸市稲荷第一小学
校より資料返却／19 市毛本郷坪
遺跡試掘調査開始／21 ひたち海
浜公園企画展「沢田揚げ浜式塩づ
くりと製法の変移」へ資料貸出〔沢
田遺跡柄振ほか〕／東海村教育委員会
へ資料貸出〔権現山古墳埴輪〕／26 取手
市より資料返却〔三反田堀塚貝塚土製腕
輪〕／27 水戸市堀原小学校へ資料
貸出〔井上資料縄文土器ほか〕

石剣「終了」／9-12 本郷東遺跡試掘
調査／10 中根小学校3年生社会
科見学／永越信吾氏〔葛飾区郷土と天文
の博物館〕資料調査〔沢田遺跡製塩土器ほか〕

／13 那珂市菅谷西小学校6年生
社会科見学／田統良太氏〔国土醸大
大学院生 資料調査原の寺瓦窯跡氏〕



18 鷹ノ巣遺跡本調査開始／大子
町上小川小学校6年生社会科見学
／ひたち海浜公園より資料返却

18-20 堀口遺跡試掘調査／19 遺
跡めぐり／20 堀口遺跡本調査終
了／東海村教育委員会より資料返
却／22 陸平をヨイシヨする会見
学／24-26 向坪遺跡試掘調査

3 ワンケースミュージアム39「い
ただきもの。3」開始

6月
7-8 東原遺跡試掘調査／雨水採
取装置設置〔下段右〕／9 小山岳夫氏
資料調査〔土古式土器ほか〕／10 外野
小学校3年生社会科見学／14-17
岡田遺跡試掘調査／17-18 ひたち



雨水採取装置設置

なか市民大学へ資料貸出〔井上資料縄
文土器ほか〕／22 田彦小学校3年生
社会科見学／23 茨城大学出前授
業〔理文センターの活動について〕／28 那
珂湊第三小学校6年生社会科見学

／29 地藏根遺跡試掘調査開始
／29-30 伝田郁夫氏〔早稲田大学院資
料調査〔井上コレクション人物埴輪〕

7月
1-2 ひたちなか市民大学へ資料貸
出〔三反田堀塚貝塚獣骨ほか〕／地藏根
遺跡試掘調査終了／伝田郁夫氏資
料調査／3 ワンケースミュージ
アム39終了／5-27 向坪遺跡本調
査／8 大和田恵子氏より資料寄贈
〔尼ヶ砦遺跡石器ほか〕／9 博物館実習施
設見学〔茨城キリスト教大学〕／12-16 市



30 茨城大学出前授業

平日の昼間
は、虎塚古墳
を訪れる人も
少なく、鳥の
声だけが森に
こだましてい
ます。そんな
中で、たくさ
んの花を一人
静かに愛でる
のは、贅沢な
時間です。
(稲田健一)

虎塚古墳 花便り

17 ヒトリシズカ

四月になると春の陽気に誘われて、昼休みのお散歩がは
じまります。この「花だより」で紹介している花は、そん
な散歩の時間に出会った花が数多くあります。今回ご紹介
する花の「ヒトリシズカ（一人静）」もその一つです。

ヒトリシズカはセンリョウ科チャラン属の植物で、高さ
が一〇〜三〇cmほどの多年草です。全国各地の山林に生育
します。花はブラシ状に小さな白い花が咲きます。その可
憐な姿から、「静御前」にたとえられ、ヒトリシズカの名
前が付いたともされています。



2015.4.22

毛本郷遺跡試掘調査 / 22 ひと

ちなかな市中央図書館「戦争体験を聞く会」へ資料貸出【武田遺跡爆弾片】 / 23 ふるさと考古学①「楽しい考古学」(講師・さかいひろ二氏) / 近藤裕子氏より資料寄贈【現生アカミシ】 / 24 ふるさと考古学②「考古学のゲンバ」(講師・さかいひろ二氏) / 30 ふるさと考古学③「遺跡で考古学」(発掘体験①) (講師・さかいひろ二氏) / ワンケースミュージアム40「市内遺跡調査2015」開始 / 31 ふるさと考古学④「遺跡で考古学2」(発掘体験②) (講師・さかいひろ二氏)

8月
2-26 本郷東遺跡本調査 / 4 中央図書館より遺物返却 / 5 飯能市郷土館特別展「高麗人集結」へ資料貸出【武田遺跡群須恵器ほか】 / 9-10 大平B遺跡・大平古墳群試掘調査 / 10 中央図書館史跡めぐり / 18 宮前遺跡試掘調査開始 / 19-20 ひとちなかな市民大学へ資料貸出【三反田峴塚貝塚垂飾ほか】 / 20 茨城放送(下段右) / 23-28 博物館実習(茨城キリスト教大学・筑波大学・筑波学院大学・東北芸術工科大学) / 24・25 佐野中学校2年生職場

スクーピーレポート



体験 / 27 ふるさと考古学⑤「想像する考古学」(発掘体験③) (講師・さかいひろ二氏) / 32 野本雄太氏(明治大学生)資料調査【鉾ノ宮古墳群ほか埴輪】 / 第9回記録集『縄文時代の剣』発行



9月
1-6 遠原遺跡・遠原貝塚試掘調査 / 2 宮前遺跡試掘調査終了 / 橋本勝雄氏(千葉県教育振興財団)資料調査【原の寺遺跡石器ほか】



8 安善靖氏より資料寄贈【君ヶ台遺跡石器(下段右)】 / ニワンケースミュージアム40終了 / 15 枝川小学校5

入館者状況 (2016.4.1 ~ 2016.9.30)

月	開館日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	1224	1 (0)	20	(0)	1244
5月	26	306	7 (4)	285	(198)	591
6月	26	145	4 (3)	377	(361)	522
7月	27	174	6 (0)	116	(0)	290
8月	26	283	11 (2)	102	(7)	385
9月	26	140	3 (2)	169	(143)	309
合計	157	2272	32 (11)	1069	(709)	3341

()内は学校数

ひたちなかな市埋蔵文化財調査センター及び(公財)ひたちなかな市生活・文化・スポーツ公社が開催する事業は『ひたちなかな市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business4.plala.or.jp/h-lcs/>

27 高野小学校6年生社会科見学 / 30 上高津貝塚ふるさと歴史の広場へ資料貸出【武田遺跡群炭化種子ほか】



6年生社会科見学 / 15-17 市毛上坪遺跡試掘調査 / 16-17 ひとちなかな市民大学へ資料貸出【井上資料埴輪ほか】 / 17 ふるさと考古学⑥「埋土種子入門」(講師・西廣美穂氏) / 27 内手遺跡試掘調査開始 / 25 鈴木忠司氏(古代学協会)資料調査【武田石高遺跡旧石器】



編集後記の笑う埴輪

映画『シン・ゴジラ』を観て感じた第一作へのオマージュを確かめるため、一九五四年に公開された『ゴジラ』のDVDを借りてきた。劇中では、古生物学者の山根博士(志村喬)がゴジラを中生代「ジュラ紀の恐竜」と同定しているのだが、その年代を「二〇〇万年前」と発言したり、古生代で絶滅した三葉虫が発見されることを根拠にしていたりと、かなり怪しい学者になってしまっている。翌年に公開された第二作『ゴジラの逆襲』も観てみると、こちらの劇中では、田所博士(清水将夫)がゴジラを「七〇〇万年前から一億五〇〇〇万年前の恐竜」と同定している。アンギラスことアンキロサウルスを同時代の恐竜と解説していることから、中生代白亜紀を指すことに間違いない。二作を連続して観ると、山根博士の見解に田所博士が異を唱えた展開になるのだが、臨席した山根博士は、これに反論することもなく、物語は進行してゆくのだった。

第一、二作のゴジラはひどい乱杭歯だ。整然と並ぶ歯という点で、表紙の解説のために、画像はメジロザメ科の現生標本の歯へと飛ぶ。



メジロザメ科の上顎右側の歯列 (菊池芳文氏所蔵標本)



ひたちなかな埋文だより 第45号

編集 公益財団法人ひたちなかな市生活・文化・スポーツ公社

2016年10月31日発行

発行 ひたちなかな市埋蔵文化財調査センター

〒312-0011 茨城県ひたちなかな市中根3499 ☎029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 高野高速印刷

表紙のモデルは大貫歩美さんです。